

グローバル教育にもの申す (英語ができればグローバル人材なのか?)

鷺北 貴史 1A

1. はじめに

「わっしー、内定とれたぜー」4年生のK君から報告があった。第一志望のメーカーだった。「最終選考の時に、自分以外はみんな留学経験者でTOEICのスコアも高かったんだよね。でも、俺の番になってく英語は話せない、留学経験も無い、でも中小企業を支援するNPOで活動してきた。工場のおっちゃんからウチに来いと言われてる。>そんな話したら、他は落ちて自分が受かっちゃったんだよね・・・」

2. これは特殊事例なのか?

いま、巷ではグローバルブームであり、あたかも英語圏に留学経験があり英語が話せることが優位に働くように言われている。しかし、このK君の事例はまわりが皆そのことを売りにしたため、留学してないこと&中小企業のおっちゃんと4年間関わってきたことが差異化を図り内定を勝ち得たのだ。報告者は本務校が廃校になった後はフリーの立場で、大学・高校・予備校など7か所で学生と関わっている。このK君は中堅私大の学生で、英語は苦手・・・一般的に大学のランクが下がるほど英語が苦手な層が増えてくる傾向がある。その場合、TOEICなどに時間を割くなら自分がONLY1になるための努力をさせる指導をしている。世の「英語＝グローバル」という姿勢に疑問を感じている報告者は、英語ができなくてもグローバルの事例を紹介し、中堅以下の大学におけるグローバル教育とは何か?を問うことを、本稿の目的とする。(しかし、高校現場では私は英語を教えている・・・)

3. 英語が全く話せないのに大手外資系ホテル勤務?

H君は、以前の本務校であるLEC大学の卒業生。当時私は進路支援センター長だったので、多くの学生と就職面談をしてきた。彼は、授業はほとんど来なかった。日本全国を旅して回っていたためである。英語は全くダメ、SPIも末期的、当然就活は1次落ちのオンパレ

ードだった。そんな彼が社だけ7次選考まで勝ち抜き内定を得た会社があった。大手外資系ホテルのRカンパニー。彼は入社二年目でホテルマンとして活躍している。なぜ、彼は内定が取れたのだろうか?進路支援センターとしては<外資系=英語>というステレオタイプに縛られ、彼は二次くらいで落ちるだろうと考えていたのだが・・・

4. 採用基準は日本を知っていること

H君の話では、3次試験の待合室で皆く留学自慢、TOEIC自慢>をしていたそう。まわりはTOEIC900点代で、自信に満ち溢れていたそう。「H君はTOEICどうなの?」と受験生仲間に聞かれたので「1回受けたけど400点いかなかった。英語は話せない」と答えると待合室一同大爆笑だったそう。しかし、4次試験に進んだ時、彼らは誰一人として残っていなかったそう・・・。それもそのはず、その時の試験内容は「あなたが海外からのお客様に日本を案内するとしたら、どのようなプランを立てて差し上げますか」というもの。日本全国旅をしてきた彼は、あふれんばかりに日本の素晴らしさを語ってきたのだ。結局、7次試験までの間に英語力を問われたのは6次だけ。それもホテルで使う会話フレーズのみ。学生時代ホテルでバイトしていた彼は、その英語だけは知っていたのでクリアできたのだ。採用後上席からあった話。「今までは語学力重視で採用してきたが、外国から来たお客様に日本のことを尋ねられても答えられない社員が増えてしまった。なので採用基準を<日本を知り、日本を愛していることがグローバル人材には不可欠>と変更した。だから君を採用したのだ。」H君はあいかわらず英語はダメ。でも海外からのリピーターさんは多いのだそう。「ジェスチャーやカタコトで意思疎通はできるので、いかにお客様が見たい日本を提示できるのか、ここだと思います。契約とか細かい英語が必要な時だけ語学が堪能なスタッフが対応しますので。私が思うに、グローバルであることはマインドではないでしょうか?海外からの観光客は異文化に触れあうこと

を求めていらっしゃるのですから……。」

5. インドネシアインターンで引きこもりから脱した少女のお話

6月に高経大の学生から、友達が家に引き込まれているので相談に乗って欲しいとオファーがあった。Rさん、19歳。話を聞くと、警視庁巡査だったが組織になじめず退職し、目標を喪失して家に居るのだという。丁度インドネシアでインターンというミッションのお手伝いを報告者はやっていたので、それに参加して異文化に触れることで自分探しをすることを提案した。わずか一週間の滞在だったが、帰国後は別人のようになっていた。「先生！私目標ができました。インドネシアの大学に進学します。そこで日本の文化を教えてください。」現地に同行したスタッフによると、Rさんはほとんど日本語で話していたのに会話は成立していて、現地でもたくさんの友達ができ、小学校では子ども達の気持ちを掴んでいた。Rさんは、「インドネシアの子ども達は日本の文化にとっても関心を示してくれました。私のチームは<日本の文化を伝えること>がミッションでしたが、その時、あまりにも母国のことを知らなすぎる自分を発見しました。もっと日本のことを勉強しなければと気づきました。日本のアニメについて説明をしてきました。」と興奮ぎみに帰国後に語ってくれた。そして今後の目標が出来たと嬉しそうに話してくれた。「現地の学生に通訳のガイドをしてもらったんですが、その学生は3カ国語話せて、それが悔しいと思って自分も絶対3カ国語は話せるようになるうと思ったからです。インドネシア語は話せる人が少ないから、まずマスターしていきたいです。」

6. 地元のスナックでマインドを鍛える

このアジアインターンで成果をあげている大学がある。この大学は偏差値ランキングではFランクに分類されているが、大手企業に多くの学生を送り込んでいる。まず地元のスナックで、大人に対して物怖じしないマインドを身に付けさせ、インドネシアやベトナムでインターンを行い、グローバルマインドを身に付けさせているのだ。Rさんは彼らと共にインターンの一週間を過ごした。「同じチームの仲間は、ヤル気も発言もすごかった。負けられないと思った。自分を出していく大切さを彼らから学びました。」

7. 日本語も出来ない学生に英語の滑稽さ

文部科学省は、大学の国際競争力を高めるために重点的に財政支援する「スーパーグローバル大学」に、国公私立大37校を選んだと発表した。これはエリート養成で必要なことだろうし、好きにやってくださいと言いたい。しかし、その考えを中～下位の大学にも押し付けるのはいかなものか？母国語ですら満足にできないレベルの学生に英語教育を強化したところで何の意味があるのだろうか？（当日、答案事例を配布します）それよりも、まずは母国語や基礎学力を上げていくことが全入時代の多くの大学の使命なのではないか。英語で授業を行うからグローバル教育なのか？英語圏に留学することがグローバルなのか？報告者が関わってきた学生の事例は、非エリート大学の取り組むべき方向性を示してくれているのではないかと。それは、まずは母国語や母国文化に対する理解を深めることであり、コミュニケーションのマインドを構築することである。語学教育はその後のお話しで、学生が必要を感じれば自ら行動し学んでいくようになるのではないかと。

8. おわりに

高崎経済大では、日本語リテラシーを今年度から必修科目とした。もっと母国語のスキルを上げることが教育上不可欠との判断からだ。全ての大学がグローバルである必要はないし、英語教育よりアジアでインターンのほうがよほどグローバルマインドは身に着くであろう。確かに、日本の学問は上位の大学がリードしている。その大学が国際的に評価を上げていくことも日本の大学教育の課題かもしれない。しかし、その尺度を全ての大学にあてはめることは愚弄である<愚弄カルな行為>と声を大にして言いたい！最近議論されているリメディアル教育学会の名称変更の件も同様である。上位校で行われているリメディアル教育に対して、REMEDYという語感には抵抗があるのだろう。しかし、今自分の教育実践、特に前任校での取り組みは、まさにREMEDYである。リメディアル教育は恥ではない。リメディアル教育は全入時代の正義なのだ！

夏の全国大会で姜尚中先生がおっしゃった言葉・・

「ウチはグローバル、地域に根差した大学作りをしていく。」この言葉にこそ、我々リメディアル教育者達が目指すべき真実があるのだ。